

(英語版)

(アラビア語版)

(目次)

見果てぬ平和 ― 中東の戦後七十五年 (六十三)

第二章 戦後世界のうねり・植民地時代の終焉とブロック化する世界 (二十五)

六十三 ゲリラになるか？ 難民になるか？ 彷徨えるパレスチナ人 (四―四)



落ち延びたのはPLOという組織だけではない。ヨルダンに避難したパレスチナ人の個人々々も同様である。しかし避難先のヨルダンは貧しく、とても安住の地と言える場所ではなかった。ある者は豊かな生活を求めて更なる移住を目指す。そのころ一度クウェイトやイラクで石油開発ブームが始まるうとしていた。彼らは出稼ぎ者として産油国に押しかけた。こうしてパレスチナ人の選択肢は二つに分かれた。PLOと行動を共にしてゲリラ戦闘員になるか、さもなければ家族を連れて異国を渡り歩くか、のいずれかであった。

第一次中東戦争(イスラエル独立戦争)でヨルダン川西岸のトウルカラムからヨルダンに難を逃れた教師のシャテイーラ一家と医師のアル・ヤーシン一家は今度も行動を共にして第二次中東戦争(スエズ戦争)が勃発した1956年、クウェイトに移った。豊かな石油収入で国造りを目指すクウェイトは教育と医療に力を入れ高給を餌に多数のアラブ人を招き寄せたからである。

パレスチナ人は二千年の昔のユダヤの民のごとくディアスポラ(離散)の民となった。

(続々)

荒葉 一也

E-mail: Arehakarazuyal@gmail.com